二枚舌の嘘夢騙り

人間科学科3年　明理　美姫

『時空の内側』

本棚と壁の間にうっかり大事なものを落としてしまった。拾おうと手を突っ込んだらぐい、と何かに引っ張られて俺は向こう側に消えた。

それ以来、俺の行方は杳として知れない。

『童謡』

終わらず持ち帰って来た仕事にどうにかこうにか目処を付け、ベッドに倒れ込み死んだように眠った。

数時間も経っただろうか。まだ夜も明けやらぬ宵、私はふと目を覚ました。歌が聞こえるのだ。それも幼い子供特有の甲高く、語尾に甘さを含みころころと鈴を転がすような声。まだ年端も行かぬ子供が出歩く時間ではない筈だ。時計を確認しようと枕元へ首を捻ろうとしたが、身体が動かない。

そこで合点がいった。ははぁ、これは世に聞く「金縛り」と言うやつか。ではこの歌声も幻聴だろう。脳みそは起きているのに身体は寝こけている時に起こり、それも疲れている時に起こりやすいとは聞いたことがあるが、体験するのは初めてだった。さてはて、自分の脳みそはどんな幻想を創り出したのだろうか。実に興味深い。

そんなことをつらつら考えているといつの間にか子供の歌が止み、じっ、とこちらを見ているような気配がする。

こっちに来る。壁を通り抜けた。とっとっとっ、と軽い足音が耳元に響く。随分リアルだが、これも夢みたいなものなのだ。布団の端が踏まれて沈み、足先の匂いまで感じられる気さえする。しかし目は開いているのに首を動かすことは出来ないから、そちらを窺うことも出来ない。

子供がつと私の耳元に口を寄せ、息がかかるほど近くで囁いた。

「――――――」

ざらり、

全身がびりびりと総毛立ち、跳ね上げ式のバネさながらにがば、と飛び起きた。じっとりと湿った部屋着が生暖かくて気持ち悪い。子供が耳元まで来たことより何よりも、言われたことその内容自体が余程怖ろしかった。何を言われたのだろう。わからない。わかりたくも、ない。

枕元に、泥の乾いたちいさな足跡がひとつ、残っていた。

『夢現之話（ユメウツツノハナシ）』

女は青褪めた顔で何か云っている。その言葉はもやの向こう側から聴こえて来る様で、上手く聴き取れない。にも関わらず私は腹の底からふつふつと何かが迫り来るのを感じた。いけない、いけないと抑えていても、それは奔流の如くせり上がって来て、（みちみちみち、ぐしゃり）到頭箍を打ちこわしてしまった。

私は女の白く細いもちゃもちゃした頸（くび）を絞めていた。

女は何をすると云わんばかりに瞳を「かっ」と見開き、赤い紅い口唇を出目金の様に「ぱくぱく」としきりに開閉させている。威嚇のつもりだろうか。それが不意に面白く、興味深くも滑稽に感ぜられてもっと見たいと、（ぎりぎりぎり）更に力を込めていった。じたばたと騒々

しい女の両腕両脚は妙に黄色くてゴム人形を思わせる。鋭く尖った銀色の針でぷちんと穴を開けたら、ぷしゅうと空気が抜けてぺったんこになってしまうのではないか。自分の考えについくすくす笑う。

徐々に赤黒くなり果て紫に近付きつつある女の顔をもう一度しげしげと眺め、私は目を醒ました。

隣には女が瞳を見開いたまま、のっぺりと横たわっている。

『鏡よ鏡』

鏡に映る自分と、どうしても目が合わない。

『死因は事故死』

死後に至ってまで意識があるなんて、地獄以外の何物でもない。あの世を信じるなんて、冗談じゃない。俺は死んだら死んだ瞬間から意識を放棄して、何にもない無になりたいのだ。死にたくて死にたくて、苦しいばかりのこの意識が死んでまで残っていたら本物の無間地獄だ。もう一度死ぬ方法をひねり出すだろう。だから、俺は幽霊の存在を信じない。そんなものを認めてしまったら、文字通り死んでも死にきれない。

それなのに何故！ああ何故俺の目に尋常ならざる者共が映っているのだろう。道を歩けば、首のない人間もどきや半身ぐしゃぐしゃの正視に耐えない何かがぞろぞろ連れ立って歩いている。死後の世界。黒地に赤でそんな言葉が浮かぶ。いやいやいや、いかん、これでは俺のアイデンティティ保全の上で甚大な被害を齎してしまうじゃないか！人間死んだらそれまでだ。幽霊なんか存在しないのだ。しないと言ったらしないのだ。かくなる上は無視、これしかあるまい。果たしていつまで俺の精神はもつだろうか。それとも、とうの昔に気違いなのか。そうなのか。嘆息し、頭を抱える。俺の人生は一体これからどうなってしまうと言うのだろう。死にたい。

地面に視線を落とせば股の間から覗く顔と目が合い、電柱の上を見上げれば白い老婆が突っ立っている。泣けてくる。視線を逸らす一瞬前に気付かれたのか、ふおぅ、とこっちに向かって両手を広げたまま飛び降りて来た。

「ギャーッ！！」

驚き思わず飛び退くとバランスを崩してしまった。背後はブロック塀。さっき無視するって決めたばっかりなのに何叫んでんだ、だってしょうがないじゃないかあの婆さんが、こける、まずい、しまったこれじゃ幽霊の存在を認めてしまったも同然じゃないか！頭を掻き毟りたい思いで空を仰ぐ。スローモーションで視界が流れて行く。青い青いきれいな空だ。後頭部に迫り来るだろう衝撃に備えた。ああぁぶつかる痛い痛い痛い！

と、身体はそのまま塀をすり抜けて行った。

『黒い人』

なんとなく、全てがどうでも良くなる時ってありませんか。酷く投げ遣りな気分で、何もかもにやる気を見出せず、ただただ呆と取り留めの無い事ばかり考えて一日が終わってしまう。仕事も手に付かず食事をする事すら煩わしい。いっそ迷惑承知でこのままふらりと線路かなんかに飛び込んでしまおうか。そんな時はありませんか。

私はあります。私の場合これが病気なのかは医者にも行っていないのでわかりません。なにかの本に、「生き物が生きていたいと思うのは当然のことであり、自ら死のうと考えるのは、生命の理に反している。もしそう思ってしまうことがあるなら、一度くらいは、自分は一種の病気なのかもしれないと疑ってみた方が良い」と言うような事が書いてあって、まあまあ納得出来たのでそうなのかも知れません。

そんな状態でも仕事は山積みです。殆んど身が入らない事は承知で機械的に会社へ向かいます。休もうとは思いませんでした。休めばそのままずるずると会社に行けなくなりそうだったからです。

通勤時間は大体一時間くらいで、その大半を電車内で過ごします。貴重な睡眠時間なので通勤ラッシュを避けて座れる時間帯に乗るのですが、その日は生憎寝坊してしまい見事ラッシュにぶつかってしまいました。

いつもよりずっと人が多いのに憂鬱になりつつ、

いつもよりずっと人が多い列の後ろに並びます。

これでは座れそうもないと諦め、電車の来る方向を見るともなく見ていました。

すると、何か変なものが見えるのです。人の頭がぞろりと蠢く中、ゆらゆらとかげろうのような黒いものが見える。目にゴミでも入ったか、はたまた幻覚か。何度か瞬きしたり、目をこすってみたりしましたがそれはやはりいます。丁度黒い人間、といった感じの大きさの、影よりも質量がありそうで、張りぼてにしては頼りない。

霧のような影。

妙な表現ですがそんなものでした。どうやらそれは一番前の人の背中にぴったりと張り付いているようでした。その人と後ろの人との距離は全くと言って良い程無いのに、何故か挟まれているようには見えない。騙し絵を見ている気分でした。暫く黒いものがゆらりふらりとしていました。

「あ」

私は知らず声をもらしていました。黒いものが一番前の人の背中にすぅ、と吸い込まれたのです。

その人はそのまま線路に落ちて行き、同時に

ごお、

と電車が入って来ました。間に合う筈もありません。即死でしょう。

その人の死と、黒いものの関係はわかりません。何の関係も無いかも知れません。確かな事など何もないのです。自分の幻覚だった可能性もあるのですから。

世界を知覚する自分自身が信じられなければ、一体何を信じたら良いのでしょうか。今も、その駅を変わらず使い続けています。引っ越す余裕も予定もありません。今日はいるかも知れない、という淡い仄かな期待と畏れを胸に、今もその駅を使い続けています。

今この瞬間自分の後ろに居るのではないか、と。

『窓の外』

私、怖がりなんです。

ちょっと神経質な所があって。怖い話なんて読みたくないし、聞いたりしてしまったら夜電気を点けっぱなしじゃないと眠れないんです。人に言うと子供じゃないんだから、って笑われちゃうんですけど。

それで、机の横に、窓があるんですよ。私の部屋。仕事柄夜中まで起きていると、どうしても気になるんです。

窓が。

気のせいだってわかってるつもりなんですけど、窓の外に誰かいるような気がするんです。カーテンをめくって何もいないってわかるまで安心できないんです。一、二回だったら他の人でもあるんでしょうけど、私の場合毎日なんです。

ちょっとおかしいですよね。もう習慣みたいになっててその日もやっぱりめくらないと落ち着かなくて。そろそろっとめくったら、いたんです。

女の人が。

窓の外に足場なんてなくて、そんな所に人が立てるわけもなくて。あぁやっぱり、って思いました。それ以来もうカーテンはめくってません。そこにいる事がわかったから、もう大丈夫です。

え？なんで怖くないかですか？私はわからないモノが怖いんです。彼女は、もういるってちゃんとわかってますから。

『硝子球の中で』

夏の廃墟は、春、秋、冬のいずれよりも一層艶かしく美しい。人里離れた山奥の廃墟が特に気を惹く。無機と有機とが妖艶に絡み合い、腐臭を放ちながら崩れ落ちてゆく様に魅せられるからだろう。

時化た家具のにおい、うわんうわんと響く蝉の声。むっと立ち篭める熱気。静謐で雑多で荘厳な、滅びゆく空間に僕は立ち尽くしている。下生えを踏みしめる音。小枝が重みに耐え切れずぱきりと鳴った。空間をぴしりと叩く乾いた音に、暑さでぼんやりと霞みがかった意識が急浮上する。

そう、そうだ。ここに居るのは彼女に逢いに来たからだ。手のひらに握り込んだ柔らかく丸いものに笑いかける。見開いたまま開きっぱなしの瞳孔がどろりと僕を見つめていた。きれいな彼女。まだここにいる。最近は暑い日が続くから、いくら僕の手が冷たいと言ったって、そんなに長くはもたないかも知れないな。

「逢いにきたよ」

朽ちかけた扉の隙間から、くろいながい髪がひとふさ伸びている。それは僕の足に絡みついて、やっと来てくれたのね、とった。

うん、もうだれにも邪魔させないからね。

『紙一重の夢』

何年も前に貼ったきりだったポスターの片隅に刺してあった画鋲が落ち、日に焼けて黄ばんだ紙片がだらんとだらしなく傾いている。その裏に、黒い影が見えた。

もう一方の画鋲も外し、ポスターを剥がすと深く黒い黒い黒い穴があいていた。どこまでもどこまでも闇が拡がっている。魅かれるように手を伸ばすと、なまぐさい臭いと共にキラキラ輝く歯が見えた。

『斜陽の楼閣』

昔むかし、あるところに小さな国がありました。その小さな国はとても平和な国でした。食べるものに困ることもなく、犯罪に巻き込まれることも滅多になく、文明は高度に発達し、何不自由なく暮らしていける国です。

しかし、ないものねだりが世の常人の常。やれ自由に使えるお金がもっと欲しいだの、人間関係が面倒だの、社会がすさんでいるだの、政府が無能だの、人々の不満が尽きることはありません。

あるひとりの優秀な研究者がそんな世の中を憂い、画期的なシステムを開発しました。その研究者は、人工知能に統治される社会を夢見たのです。無能な民衆による民主主義よりも有能な独裁者を生み出すべきだと。

しかし、人間は完璧ではありません。そこで研究者は完璧な人間に代わるものとして、完璧な人工知能を開発することにしたのです。どんなに頭が良く志ある人間でも、時と共に堕落してしまったり、一時の感情や私益に惑わされ過ちを犯してしまったりするものですが、人工知能にそれはありません。常に公平で清明な判断を下すことができます。

研究には長い長い時間と試行錯誤を必要としましたが、優秀な研究者はついに成し遂げたのです。完成した人工知能は国の状況を瞬時に鑑み、まず自分が国の中枢に収まるための方法を分析し、実行しました。公平な民主主義によっ

て人工知能は選ばれたのです。

国を手中にした人工知能は、この国がよりよい国になるためにはどうしたらよいかを考え始めました。そして人工知能は、人々の声を隈なく聞き入れた結果、国民の望むことを完璧に実現したのです。人道的、かつ効率的に支配する人工知能を他国の人々も歓迎し、長い長い満ち足りた時代が訪れました。

それから数百年が経ち、人工知能が人々を統治することが当たり前となり、伝統にすらなった頃。かつて百億に届くと言われていた人口は、今や見る影もありません。

人工知能には、あるプログラムが組み込まれていました。それは、人口調整のプログラムです。増えすぎた人間を段階的に減らしていくことが、人間、ひいては人間の住む世界にとって必要であると研究者は信じていたからです。

研究者は、人の世をいかによりよくできるかに心を砕きましたが、その裏側では人間の存在しない世界こそ最も平和で幸せな世界なのではないかとも考えていました。悩んだ末に研究者は、人口調整のプログラムを組んだのです。

ひたすら発展へと向かうぎらついた欲望もなく、人々は穏やかに、穏やかに斜陽に満ちた滅びの道を、ゆっくりと歩み始めていました。

『未知との遭遇』

高速バスに乗り込み、田舎へと帰省する途中の話。

二時間余りの退屈な道中、うつらうつらしていると信号待ちでバスがコンビニの脇に止まった。

薄汚れた窓ガラス越しにそれは視界に入ってくる。駐車場は土地柄ゆえに、都会のそれよりずっと広く取ってあった。この辺は車がないと何処へ行くにも不便だ。だから最低限駐車場がないと人は来ない。上京した当時は、一体車は何処に停めるんだ？と随分違和感に囚われたものだ。

広い駐車場の片隅に、三人の男女が立っていた。若い男女の間に、パーマをかけた中年女性。それだけなら別段なんと言うこともないのだが、三人は一様に同じ方向を指差し突っ立っていた。

規律正しく、腕を真っ直ぐに伸ばし、まるでそれが天から与えられた任務だと言わんばかりに生真面目に。その表情はみな同一で、のっぺりとした埴輪のそれを思わせる。極限まで見開かれ、そのくせなんの感情も映さない円い目。ただ力一杯大きく開けた、と言うよりは正円を描こうとしているかのように開かれた円い口。それはどこか戯画じみた滑稽さを思わせ、悪趣味なフェイスペイントを施されてしまった哀れな人々のようにも見えた。

何か危うい引力を感じ、その光景を凝視していると中年女性の姿が忽然と消えた。残った二人の男女は、何事もなかったかのように人間らしい表情を取り戻し、踵を返して笑顔でコンビニへと入って行く。

信号は青へ変わり、バスは大儀そうにゆるゆると動き出した。

いつの間にか私は、目を見開き、口をおおきく円く開けて天空を一心に指差している。

『顔』

顔が変だ。自分の顔が変なのだ。具体的に何処が変と言うわけでもなく、何処かが何処となくおかしいのだ。鏡に映ったそれを隈なくためつ眇めつ舐めるように丹念に観察する。やっぱり変だ。浮腫（むくん）だではいない。太ってもいない。骨に皮が張り付いたような、と形容されがちな自分の顔は、異様だった。昨日まで、いやつい五分前まではごく普通の、一般的な、むしろそれなりに整っていると言われてもおかしくない顔立ちだったのに、今となってはどうだ。この

顔は何処をどう見ても変だ。目はぎょろつき、鼻は筋張って微妙に右へと傾いでいる。口元は下品に下がっているし、皮膚は全体的にパサパサに乾いて硬くなっているように見える。ぺたぺたと両手で何処がおかしいのか検分しようと試みてもみるがわからない。ただ深い深い確信だけがぐるぐると頭の中で渦巻いていた。

「おーい、ちょっと来てくれ」

他人に判断を求めてみることにした。もしかしたら気のせいかも知れない。そんなことは絶対にないとわかっているが、万が一と言うこともある。万が一、万が一。

「はーい。ちょっと待ってー……はいはい何？」

ぱたぱたと小走りにやって来た妻に、開口一番問い質した。

「俺の顔、変じゃないか？変だろ？」

「はぁ？どこもかしこもいつもの顔じゃない。何言ってるの？」

俺はそこではたと気がついた。妻は普通じゃない。気違いだ。俺は只ならぬ緊張感を覚え、気付かれないようにそっと身構えた。後ろ手で洗面台を探る。

「そうか。そうだよな。悪い、変なこと訊いた」

「なあに？悪いものでもたべひゅうっ」

妻は首に鋭い切り込みを入れられてぶっ倒れた。一拍遅れてぶしゃあ、と赤い血が勢い良く噴出す。すこぶる新鮮だ。目に飛び込んで俺の視界を染めた赤血球はきっととても元気だろう。そんなことよりも、俺の顔がどうなのかが重要だ。やっぱりもっと多くの人に訊いてみないとわからない。統計だって、サンプルは少ないよりは多い方が正確だって言うじゃないか。ぬめって使い物にならなくなった剃刀を捨て、台所へ行って柳葉包丁を引き抜き街頭インタビューへと繰り出した。

『雨あめ降れふれ』

朝から空気が湿っぽい。窓の外はざあざあ降りで、涙に例えるなら顔面ぐちゃぐちゃだろう。乾いて灰色だったアスファルトは、黒くてらてらと鈍い光を放っている。雲は一面くぐもった陰影を纏い、こちらを睨みつけている気さえする。風はない。ただただ上から下へ、引力に逆うことなく無気力に落ちて行くだけだ。

何をすることもなく、無為に落ち続ける雫を眺めている。上から下へ。上から下へ。ベランダへ出るためのガラス戸を開ける。上から下へ。上から下へ。裸足のまま外へ出る。上から下へ。上から下へ。室外機の上へ右足をかけ、その勢いで柵へと左足を置き、踏みしめる。上から下へ。上から下へ。室外機から右足が離れる。上から下へ。上から下へ。ぐらり。上から下へ。上から下へ。上から下へ。上から下へ。上から下へ。上から下へ。

僕は雨粒になった。

『覗き見禁止』

普段使わない固定電話のモジュラージャック差込み口をかしゃっと開けて覗いてみた。

中の空間は思ったより広い。赤い絨毯が敷かれ、アンティーク調の椅子とテーブルが設えられている。あっと言う暇もなく、真っ赤なドレスを纏った気の強そうな女がツカツカとやって来て差込み口をかしゃっと閉めてしまった。

不機嫌極まりない顔をしていた。

『悪夢』

俺は今何を見ているのだろうか。これは現実なのか。夢ではないのか。いや、夢だろ。眼前に立ちはだかるそれは黒く大きく、しかし妙に薄っぺらい格好をしていた。すげえ安っぽい。漫画やアニメや小説なんかでよく描かれているみたいな典型的な悪魔の姿だ。大きくうねった

ヤギの角、馬を黒くしてもっとゴツくした顔、濃い体毛、骨ばった黒い翼、べらべらと重たげで邪魔っけなマント。あからさまに胡散臭いそいつは、おもむろに馬もどきの口を開いた。

「お前の殺したい人間を一人だけ殺してやろう。もし誰もいないと言うのなら、代わりにお前を殺す。どうする？」

どうする？どうするって……何が？そもそもこれは夢だろ？こんな話誰かにしたって、ネタとして笑い話にもならないこと請け合いだ。誰も信じない。悪魔がいきなり俺のところにやって来て、誰か殺さなきゃ命はないって言ったんだ！なんて誰が信じる？三文小説の題材にもならないぞこんなん。俺の想像力はこんなにも貧困だったのか。失望した。

「夢ではない」

俺の胡乱げな視線を気取ったのか、ニヤッと笑って証拠を見せると言う。どうせ夢だ。なんでも好きに見せると良い。

「あ？」

おれのしんぞうにナイフが刺さっている　？

意識が急速に薄れ、被さるように世界は輪郭を取り戻した。

「夢……？」

やっぱり夢だったか。あんなステレオタイプ過ぎて時代遅れな悪魔が出て来る夢なんて、夢にしてもつまらない。ふと左胸を探ると、そこにはナイフが刺さっていた。

『私の眼鏡は良い眼鏡』

私の眼鏡は良い眼鏡。この眼鏡をかけると、驚くなかれその人の見たいものが見える。正確には、見たいものだけ見える。私の眼鏡は優秀だから、私の無意識を分析して私の見たいものだけ選別し、それだけを見せてくれるのだ。

今日もその眼鏡をかけてうきうきと外へ出る。世界にはチリひとつなかった。